

平成 22 年 5 月 11 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19529001

研究課題名（和文） 18・19 世紀ドナウ二公国をめぐる国際関係の変容過程に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Transformation Process of the International Relations concerning the Danubian Principalities in the eighteenth and nineteenth Centuries

研究代表者 黛 秋津

(MAYUZUMI AKITSU)

北海道大学・スラブ研究センター・学術研究員

研究者番号：00451980

研究代表者の専門分野：史学

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：西洋史、国際関係史

1. 研究計画の概要（600～800 字程度で）

本研究は、オスマン帝国に従属するワラキアとモルドヴァの二つの公国に注目し、両国をとりまく国際関係が、18 世紀後半及び 19 世紀初頭にかけての時期にどのように変化し、両国がいかにして西欧世界に包摂されていったのか、その過程を、政治外交面を中心に実証的に明らかにすることを目的とするものである。従って本課題の研究遂行に当たっては、この問題を複眼的・総体的に考察するため、ワラキア・モルドヴァ両公国、オスマン帝国、西欧諸国、ロシア帝国のそれぞれの一次史料を利用することが必要であり、それらの調査・収集と分析が研究計画の多くの部分を占める。

具体的には、まず本課題に関係する先行研究文献を網羅的に集め参照することによって、問題の背景をおさえる。そして 1・2 年目はルーマニアとトルコ、3 年目はフランス、4 年目はロシアにて、外交文書史料を中心とする現地史料の調査と収集を行い、帰国後にその収集した史料の分析を行う。そうした作業を通じて、(1) 18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけての、オスマン帝国とワラキア・モルドヴァ両公国間の宗主・付庸関係の変容過程、(2) またそうした宗主・付庸関係の変容に大きな影響を与えることになった、同時期のロシアと西欧諸国（特にハプスブルク帝国とフランス）による両公国問題への関与拡大のプロセス、などを分析し、オスマン帝国というイスラーム世界の中核的な国家の支配下にあった現在のルーマニアの地が、次第に西欧諸国やロシアと様々な面で関係を深め、結果的に西欧を中心とする国際システムに包摂されてゆく初期の過程を明らかにする。

2. 研究の進捗状況

研究は概ね計画通りに進んでいると考えられる。

まず先行研究の参照については、予算使用の優先順序の問題で、当初は雑誌論文の調査とその複写を集中して進め、その後関連図書を購入するという順番となったが、いずれにしてもこれまでに、ルーマニア史、バルカン史、オスマン帝国史、ヨーロッパ国際関係史などの諸分野での、本課題に関連する先行研究文献をかなりの程度参照することが出来、本課題の背景を十分に把握することが出来た。それと同時に、言語的な制約や学問的ディシプリンの壁により、西欧・ロシア・オスマンの三方面の史料に依拠する本課題のような研究が、これまでほとんど行われていないことも改めて確認した。

次に海外での史料調査と収集に関しては、1・2 年目にはブカレストのルーマニア国立図書館とイスタンブールの総理府オスマン古文書館、3 年目にはパリの外務省附属外交史料館にて調査・収集を実施した。申請時の交付希望額より実際の交付額が減額された影響で、調査期間を予定より短縮せざるを得なくなったが、それでも必要な史料は何とか集められており、これについても現在まで予定通りに進んでいると言える。

最後に成果の発表については、「1. 研究計画の概要」の欄で挙げた 2 つの論点のうち、(1) のオスマン・両公国の宗主・付庸関係の変容に関しては、現在論文執筆中であるが、(2) のロシアと西欧諸国のワラキア・モルドヴァへの進出過程に関しては、以下に挙げる論文や学会発表などで成果を公にすることが出来た。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

上の欄で述べたように、研究計画の大きな部分を占める史料調査・収集は順調に実施され、また成果に関しては、オスマン・両公国関係の変容に関する成果の発表がやや遅れたものの、近日論文を公開する予定であり、もう一つの論点であるロシア・西欧のワラキア・モルドヴァ進出に関しては、いくつかの論文発表、学会報告によって、その研究成果を十分にできていると考えられる。

4. 今後の研究の推進方策

最終年度である平成 22 年度は、モスクワのロシア外務省附属文書館で調査を行い、ロシア側のこの問題に関する史料を収集し分析して、本研究を完結させるわけであるが、周知の通り、モスクワでは地下鉄テロなどが発生しており、渡航の際には事前に状況を把握して安全には十分に注意しなくてはならない。万が一調査が困難と判断された場合には、刊行史料に限定されるものの、本課題関連のロシア帝国の史料を所蔵している北海道大学で長期の調査を行うことに変更することも考えている。

また本課題の研究を進めるうちに、次第に「黒海周辺地域の一部としてのバルカン」という視点の重要性が浮かび上がってきた。これに関しては、残り 1 年の期間で深く取り組むことは困難であるが、こうした視点をも考慮しつつ、最終的な成果の取りまとめに努力するつもりである。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①黛秋津「ワラキア・モルドヴァにおけるロシア・ハプスブルク帝国の領事館設置問題—18 世紀後半における黒海の国際化との関連で—」『東京国際大学論叢—経済学部編』、第 42 号、2010 年 3 月、177—197 頁。査読無。

②黛秋津「ロシアのバルカン進出とキュチュク・カイナルジャ条約 (1774 年) —その意義に関する再検討」『ロシア・東欧研究』第 37 号 (2008 年度)、2009 年 4 月、98—109 頁。査読有。

[学会発表] (計 2 件)

① Akitsu MAYUZUMI, “Challenging ‘the Ottoman Lake’: Internationalization of the Black Sea Region in the Second Half of the XVIII Century,” Black Sea Region in International Relations: Old Issues, New Trend (An International Symposium, 1-2

October 2009, Bogaziçi University, Istanbul), 2009 年 10 月。

②黛秋津「ロシアのバルカン進出とキュチュク・カイナルジャ条約 (1774 年)」2008 年度ロシア・東欧学会研究大会 (名古屋学院大学、10 月 12 日) 2008 年 10 月。

[図書] (計 1 件)

①六鹿茂夫編著、佐々田誠之助、住谷春也、菅沼聡也、黛秋津、郷成伸、関口義人、新渡戸常憲、ギャルマト・ボグダン、伊藤太吾、新免光比呂、田崎恵子、中島崇文、上垣彰、吉井昌彦、奈良弘之、野田望、アウレリアン・ネアグ、みやこうせい著『ルーマニアを知るための 60 章』明石書店、2007 年 10 月、87-100、199-202、216-219 頁。